

## 競技者アイデンティティに関する研究 —評価尺度の作成と性、文化、競技レベル、動機づけとの関係—

磯貝浩久 Britton W. Brewer Allene E. Cornelius Jennifer Etnier 徳永幹雄  
(九州工業大学) (Springfield College) (Springfield College) (Arizona State University) (九州大学)

### 1. はじめに

競技者が自己をどのように捉え、また競技者としての役割をどの程度内在化しているかによって、スポーツ場面での様々な行動や考え方方が相違すると考えられる。そのため、競技者の自己概念など自己のあり方について検討する必要がある。近年の自己概念に関する研究では、包括的に自己概念を捉えるという見方から、多次元的な観点から自己を評価する見方へと変化している (Harter, 1990)。このような、多次元的な自己概念の捉え方に立脚すると、例えば、学習者としての自己と競技者としての自己の捉え方は異なると考えられ、それぞれの状況で捉えられた自己のあり方が、認知や行動に影響すると考えられる。

このような観点から、競技者アイデンティティという概念が提示された (Brewer, Van Raalte, Linder, 1993)。競技者アイデンティティとは、「競技者としての役割に対する同一性の程度」として定義される。また、競技者アイデンティティは狭義には、自己に関する情報過程を導く認知構造またはシェマであり、広義には家族、友人、コーチ、教師、メディアなどの影響を受けて形成される競技者としての社会的な役割である。そして、競技者アイデンティティは、競技者の価値観、感情、認知、動機づけと関連する (Brewer, Van Raalte, Linder, 1993)。また、怪我の認知や対処行動に影響し (Brewer, 1993)、競技引退などのキャリア形成に影響する (Hinitz, 1988)。これらのことから、競技者アイデンティティに関して検討する重要性が認められる。

わが国では、競技者のアイデンティティの確立についての臨床心理学的な研究が 2-3 報告されているが、競技者アイデンティティそのものについての検討は行われていない。そのため、Brewer らを共同研究者として迎え、日本人競技者に適用できる尺度の作成を中心に、性、文化、競技レベルとの関係を検討し、動機づけの中心的理論である目標志向性との関係について検討することとした。

従って、本研究の目的は、競技者のアイデンティティについて、以下の 3 点を明らかにすることとした。

1. 競技者アイデンティティを評価する尺度を作成する。
2. 競技者アイデンティティの性差、競技レベルとの関係、競技経験年数との関係について、日本と米国の大学生を対象として明らかにする。
3. 競技者アイデンティティと目標志向性の関係を日米で検討する。

欧米の研究では、競技者アイデンティティは、低い競技レベルでは性差がみられ、高い競技レベルでは性差がみられないとされ、競技レベルが高まるとともに競技者アイデンティティが強まることが示されている (Brewer et al., 1993; Murphy, Petitpas, and Brewer, 1996)。本研究では、同様の傾向が日本でもみられると仮定した。また、競技者アイデンティティは、スポーツ場面での目標志向性にポジティブな影響を及ぼすと考えた。

## 2. 研究方法

### 2.1 調査対象

調査対象は、アメリカ合衆国の2つの大学（州立大学及び私立単科大学のスポーツ科学部）と、日本の2つの大学（国立大学体育学部及び私立大学スポーツ科学部）において、体育実技授業およびスポーツ科学関連科目の授業を履修している男女である。米国の対象者数は、男性124名、女性92名であり、日本は男性258名、女性116名で合計590名である。

米国の対象者の人種は、白人186名、アフリカ系アメリカ人7名、ヒスパニック系アメリカ人11名、アジア系アメリカ人4名、その他6名である。日本の対象は、すべて同種の日本人（374名）である。対象者の平均年齢は、米国では20.3才（SD=2.79）であり、日本では19.4才（SD=.97）である。競技経験年数の平均は、米国で11.7年、日本で8.3年である。また、競技種目には、野球、バスケットボール、フットボール、体操、ハンドボール、サッカー、陸上競技などさまざまな種目が含まれている。スポーツ競技のレベルに関して、438名が大学代表であり、147名がレクリエーションとしてスポーツをするレベルである。

### 2.2 調査内容

#### 1) 個人の属性等に関する内容

調査対象者の年齢、性別、人種、スポーツ競技種目、競技経験年数について調査した。

#### 2) 競技者アイデンティティ尺度

競技者アイデンティティ尺度を作成するために、Brewer, Van Raalte, Linder (1993)により作成された Athletic Identity Measurement Scale (AIMS) を基にした。この尺度では、競技者アイデンティティを「競技者としての役割に対する同一性の程度」と定義した上で、1因子で評価するものである。初期の研究では10項目で尺度が構成されていたが (Brewer, Van Raalte, Linder, 1993)、最近の研究では10項目の中の7項目で評価することが妥当であるとされている (Brewer & Allen, in press)。「私には、スポーツに関する目標がいくつもある」「スポーツは、私の生活のなかで最も大切なものです」などの項目で構成される。尺度は、「全く違う(1)」から「全くその通り(7)」までの7段階評定尺度である。

#### 3) スポーツにおける課題・自我志向性尺度

Duda (1989) により作成された、Task and Ego Orientation in Sport Questionnaire (TEOSQ) と、それを日本語に翻訳した尺度 (Isogai, Brewer, Allen, Jennifer, and Tokunaga, in press) を用いた。

スポーツにおける課題・自我志向性尺度は、スポーツ場面での目標志向性を課題志向性・自我志向性の2つの次元から評価するものである。「スポーツにおける課題志向性」とは、運動技能の熟達や能力を伸ばすことなど、学習や熟達のプロセスそのものを重視する志向性である。これに対して、「スポーツにおける自我志向性」は、能力に価値をおき、他者との比較を通しての達成を重視する志向性である。尺度は、「ぜんぜんそう思わない(1)」から「とてもそう思う(5)」までの5段階評定である。日本語版と英語版の信頼性・妥当性は示されている。

#### 4) スポーツにおける個人・社会志向性尺度

磯貝・徳永・橋本 (2000) により作成された、スポーツにおける個人・社会志向性尺度とそれを英語に翻訳した尺度 (Individual and Social Orientation in Sport Questionnaire (ISOSQ); Isogai, Brewer, Allen, Jennifer, and Tokunaga, in press) を用いた。

スポーツにおける個人・社会志向性尺度は、スポーツ場面で信念や主張を貫くなど個人内基準への

適応を志向する「スポーツにおける個人志向性」と、スポーツ集団への適応を志向する「スポーツにおける社会志向性」からなる。尺度は、「ぜんぜんそう思わない(1)」から「とてもそう思う(5)」までの5段階評定である。日本語版と英語版の信頼性・妥当性は示されている。

### 2.3 手順

調査項目の異文化間での等価性を確保するために、英文から和文へ翻訳する際に、訳し戻し法を用いた。翻訳の専門家と大学の語学担当教員それぞれが、Athletic Identity Measurement Scale を日本語に翻訳し、再び英語に翻訳した。その際に、英語のオリジナル版と英語翻訳版が比較され、差異がみられる場合には日本語版の修正を行った。

調査は、対象者のインフォームドコンセントを得た上で、大学体育教員と研究補助者が実施した。

## 3. 結果

### 3.1 競技者アイデンティティ尺度の作成

#### 1) 因子構造

競技者アイデンティティ尺度の因子構造を検討するために、日本と米国別に探索的因子分析を行った。主因子法、パリマックス回転を行い、固有値 1.0 以上の基準で因子を抽出した。項目の選択は、因子負荷量が 3.0 以上の基準で行った。結果は表 1 に示した。

日本では、7 項目全てが第 1 因子に含まれた。因子負荷量は、.33-.75 の範囲であり、因子の寄与率は 36.4% であった。米国も同様に、7 項目全てが一つの因子としてまとまった。因子負荷量は、.45-.76 の範囲であり、因子の寄与率は 42.6% であった。このことから、日本語版競技者アイデンティティ尺度は、オリジナルの英語版と同様の因子構造であることが示された。

さらに、日本語版競技者アイデンティティ尺度の因子モデルが適合しているかを確かめるために、日本人のデータだけを対象として、検証的因子分析を行った。結果は表 2 に示した。 $\chi^2$  二乗値は、71.06 であり、適合度指標の GFI は .95、CFI は .92、IFI は .90 であった。3 つの適合度指標の値は、.90 以上ならばモデルは適合しているとみなされることから、日本語版競技者アイデンティティ尺度の 1 因子モデルの妥当性が明らかにされたといえる。

以上、探索的因子分析及び検証的因子分析の結果から、因子構造が明らかにされ妥当性が示された。

#### 2) 信頼性

競技者アイデンティティ尺度の信頼性を調べるために、クローンバックの  $\alpha$  係数を算出した。その結果、日本語版競技者アイデンティティ尺度の  $\alpha$  係数は .79 であり、英語版は .82 であった。このことから、日本語版競技者アイデンティティ尺度は英語版と同様に高い信頼性を有することが明らかにされた。

以上、信頼性・妥当性を有する日本語版競技者アイデンティティ尺度が作成された（尺度は資料参照）。

### 3.2 競技者アイデンティティの性、国、競技レベルの相違

競技者アイデンティティの 3 要因（性×国×競技レベル）の分散分析を行った。性は男・女の 2 水準、国は日本・米国の 2 水準、競技レベルは大学代表レベル・レクレーションレベルの 2 水準であった。

その結果、国に有意な主効果 ( $F (1,582) = 5.48, p < .05$ ) が認められた。米国人競技者 ( $M = 5.17$ )

が日本人競技者 ( $M = 4.91$ ) よりも競技者アイデンティティが高いことが示された。競技レベルに有意な主効果 ( $F(1,582) = 56.04, p < .001$ ) が認められ、大学代表レベルの競技者 ( $M = 5.47$ ) はレクリエーションレベルの競技者 ( $M = 4.61$ ) と比較して、競技者アイデンティティが高いことが示された。性については、有意な主効果 ( $F(1,582) = 1.41, p > .05$ ) が認められなかった。

性×競技レベルに有意な交互作用 ( $F(1,582) = 5.46, p < .05$ ) が認められた。事後検定を行った結果、大学代表レベルの男性 ( $M = 5.41$ ) と女性 ( $M = 5.54$ ) には有意差がみられず、レクリエーションレベルの男性 ( $M = 4.81$ ) と女性 ( $M = 4.41$ ) の間に有意な差が認められた。また、大学代表レベルの男女はレクリエーションレベルの男女よりも競技者アイデンティティが高かった。

### 3.3 競技者アイデンティティと目標志向性の関係

競技者アイデンティティが、スポーツにおける目標志向性にどの程度影響しているかを明らかにするために、競技者アイデンティティを説明変数とし、スポーツにおける課題・自我志向性及びスポーツにおける個人・社会志向性を目的変数として重回帰分析を行った。分析の結果は、表4に示した。

日本において、競技者アイデンティティと課題志向性 ( $\beta = .17, p < .01$ )、社会志向性 ( $\beta = .28, p < .001$ )、個人志向性 ( $\beta = .15, p < .01$ ) との間に有意な正の関係が認められた。つまり、日本では競技者アイデンティティが強くなるに従って、課題志向性、社会志向性、個人志向性が高まることが明らかにされた。

米国において、競技者アイデンティティと課題志向性 ( $\beta = .21, p < .01$ )、個人志向性 ( $\beta = .20, p < .01$ ) との間に有意な正の関係が認められた。すなわち、米国では競技者アイデンティティが強くなるとともに、課題志向性と個人志向性が高まることが明らかになった。

重回帰分析の説明力は、日本で 24.5% であり、米国で 14.3% であった。

## 4. 考察

本研究の目的は、日本人競技者の競技者アイデンティティを評価するための尺度を作成すること、競技者アイデンティティの日米の相違、性差、競技レベル差を明らかにすること、競技者アイデンティティと目標志向性の関係を検討することであった。

競技者アイデンティティの概念ならびに評価するための尺度は、Brewer, Van Raalte, Linder (1993) 及び Brewer & Allen (in press) により示されているため、本研究ではその日本語版を作成することとした。探索的因子分析の結果、1 因子構造であることが確かめられ、検証的因子分析からオリジナルのモデルと適合することが示された。また、 $\alpha$ 係数を求めた結果、尺度の信頼性が確認された。これらのことから、日本語版競技者アイデンティティ尺度は妥当性と信頼性を持つことが明らかになり、尺度が完成されたものと思われる。

欧米の研究では、競技者アイデンティティのあり方がスポーツ場面での怪我の認知や対処に影響すること (Brewer, 1993)、競技引退などのスポーツキャリア移行期の様々な問題と関係すること (Hinitz, 1988)、スポーツへのコミットメントやスポーツの楽しさと関係すること (Carpenter, Scanlan, Simons, and Lobel, 1993)、競技パフォーマンスを高めること (Danish, 1983) などが報告されている。わが国ではこのような検討は行われてこなかったが、本尺度が作成されたことにより、前述した様々なテーマについて研究を促進することが可能になるであろう。さらに、わが国では競技者のアイデンティティに関して、臨床心理学的な研究が主流であったが、本尺度により定量的な観点からの検討ができるため、質的な研究に加えて量的な側面から競技者のアイデンティティとスポーツ行動の関係について

把握できるようになるとと思われる。

日本人の競技者アイデンティティは米国人と比べて低いことが示された。すなわち、性や競技レベルの相違に関係なく、日本人競技者は競技者としての役割に対する同一性の程度は低いといえる。これまでの比較文化的研究では、英国とマレーシアのバドミントン選手の競技者アイデンティティは相違しないことや (Matheson et al., 1995)、ロシア人の競技者アイデンティティは英国人と米国人よりも高いこと (Hale et al., 1996) などが示されているが、なぜ異なるのかは明らかではない。日本人競技者がなぜ低かったのかを明らかにするために、文化と競技者アイデンティティに関する何らかの理論的枠組みを用いて検討していく必要があるだろう。

日米とも競技レベルが高い者は、競技レベルが低い者と比較して競技者アイデンティティが高いことが明らかになった。この結果は、欧米で従来示されてきた知見と同様であり、競技レベルが高まるとともに、競技者としての自覚や競技者役割に対する認知が高まると考えられる。

競技者アイデンティティの性差に関して、主効果は認められなかったものの、競技レベルとの交互作用がみられた。大学代表など競技のレベルが比較的高い者の競技者アイデンティティは、男女間で相違しないが、競技レベルが低いとみなされるレクリエーションレベルでは男性が女性よりも高い傾向を示すといえる。欧米の研究でも同様の傾向が示されている (Brewer et al., 1993; Murphy, Petitpas, and Brewer, 1996)。このことは、スポーツへの社会化の過程において、スポーツが男性的であるとみなされるため、競技レベルの低い段階では男性の競技者アイデンティティが早く確立されていき、競技のレベルが高くなると次第に女性の競技者アイデンティティも高まり、男性と変わらなくなると解釈することができよう。

競技者アイデンティティは、スポーツにおける目標志向性と密接に関係することが示された。日本人は競技者アイデンティティが高まると、技能の熟達のプロセスを重視し、スポーツ集団への適用を重視し、そしてスポーツ場面で個性を発揮するなど内的基準を重視するようになるといえる。しかし、他者との比較を通しての達成は競技者アイデンティティの程度と関係しないものと思われる。一方、米国では競技者アイデンティティの高まりは、技能の熟達のプロセスを重視と、個性の発揮など内的基準の重視の2つと関係しており、スポーツ集団への適用の重視や他者比較の重視とは関係しないといえる。このように、競技者アイデンティティは動機づけのあり方である目標志向性と関係するものと思われ、さらにその関係の仕方は日米で相違すると考えられる。

最後に、わが国では競技者アイデンティティに関する研究はほとんど行われてこなかったが、本研究により評価尺度が作成され、性・文化・競技レベルの特徴及び目標志向性との関係が明らかになったことから、今後競技者アイデンティティに関する検討が活発に展開されることが期待される。

## 5. まとめ

本研究は、日本人競技者に適用できる競技者アイデンティティ尺度を米国との比較を通して作成することを主たる目的とし、さらに競技者アイデンティティの性・文化・競技レベルの相違及び、目標志向性との関係について検討した。374名の日本大学生競技者と、216名の米国大学生競技者を対象とした。因子分析の結果、7項目1因子で構成される日本語版競技者アイデンティティ尺度の妥当性が示され、 $\alpha$ 係数から信頼性が示された。競技者アイデンティティは、米国人が日本人より高く、競技レベルの高い者は低い者よりも高く、競技レベルが高いと性差がみられず、競技レベルが低いと性差がみられることが明らかにされた。また、競技者アイデンティティは、目標志向性と関係することが示された。今後は、本研究で作成された尺度を用いてさらに検討していく必要がある。

## 参考文献

- Brewer, B. W. (1993) Self-identity and specific vulnerability to depressed mood. *Journal of Personality* 61: 343-364.
- Brewer, B. W., Van Raalte, J. L., and Linder, D. E. (1993) Athletic identity: Hercules' muscles or Achilles' heel? *International Journal of Sport Psychology* 24: 237-254.
- Brewer, B. W. and Cornelius, A. E. (in press) Norms and factorial invariance of the Athletic Identity Measurement Scale (AIMS).
- Carpenter, P. J., Scanlan, T. K., Simons, J. P., and Lobel, M. (1993) A test of the sport commitment model using structural equation model. *Journal of Sport and Exercise Psychology* 15: 119-133.
- Danish, S.J. (1983) Musing about personal competence: The contributions of sport, health, and fitness. *American Journal of Community Psychology* 11: 221-240.
- Duda, J. L. (1989) Relationship between task and ego orientation the perceived purpose of sport among high school athletes. *Journal of Sport and Exercise Psychology* 11: 318-335.
- Duda, J. L., & Allison, M. T. (1990) Cross-cultural analysis in exercise and sport psychology: A void in the field. *Journal of Sport & Exercise Psychology* 12 : 114-131.
- Hale, B. D., James, B., and Stambulova, N. (1999) Determining the dimensionality of athletic identity: a <Herculean> cross-cultural undertaking. *International Journal of Sport Psychology* 30: 83-100.
- Harter, S. (1990) Causes, correlates and the functional role of global self-worth: A life-span perspective. In R. J. Sternberg and J. Kolligian. (Eds.) *Competence considered* (pp. 67-97). New Haven, CT: Yale University Press.
- Hinitz, D. R. (1988) Role theory and the retirement of collegiate gymnasts. Unpublished doctoral dissertation, University of Nevada, Reno.
- 磯貝浩久 (2000) 運動行動に対する動機づけ理論とその文化規定. *健康支援* 1(2) : 15-26.
- 磯貝浩久・徳永幹雄・橋本公雄 (2000) スポーツにおける個人・社会志向性尺度の作成. *スポーツ心理学研究* 27(2) : 22-31.
- Isogai, H., Brewer, B. W., Cornelius, A. E., Komiya, S., Tokunaga, M., and Tokushima, S. (2001) Cross-cultural validation of the Social Physique Anxiety Scale. *International Journal of Sport Psychology* 32: 76-87.
- Isogai, H., Brewer, B. W., Cornelius, A. E., Jennifer, E., and Tokunaga, M. (in press) A cross-cultural analysis of goal orientation in American and Japanese physical education students. *International Journal of Sport Psychology*.
- Matheson, H., Brewer, B. W., Van Raalte, J. L., & Andersen, M. B. (1994) Athletic identity of national level badminton players: A cross-cultural analysis. In T. Reilly, M. Hughes, & A. Lees (Eds.), *Science and racket sports* (pp. 228-231). London: E. & F. N. Spon.
- Murphy, G. M., Petitpas, A. J., and Brewer, B. W. (1996) Identity foreclosure, athletic identity, and career maturity in intercollegiate athletes. *The Sport Psychologist* 10: 239-246.

## 競技者アイデンティティ尺度 (AIMS-J)

スポーツに参加する上で、あなたはどのように思っていますか。  
最もあてはまる〇を一つだけ塗りつぶしてください。

表1. 競技者アイデンティティ尺度の因子分析結果

番号 項目	因子負荷量	
	日本	米国
1 私は、自分のことを競技者だと思う	.57	.64
2 私には、スポーツに関する目標がいくつもある	.66	.75
3 友人にはスポーツ競技者が多い	.33	.71
4 スポーツは、私の生活のなかで最も大切なものです	.75	.76
5 他の何よりも、スポーツについて考えている時間が長い	.75	.69
6 スポーツでうまくいかない時は、自分がいやになる	.52	.45
7 もし怪我をしてスポーツができなければ、とても落ち込むだろう	.53	.51
寄与率 (%)	36.4	42.6

表2. 日本における検証的因子分析結果

	chi 2	df	p	GFI	CFI	IFI
日本人競技者	71.064	14	1.23775E-09	0.949	0.918	0.92

表3. 競技者アイデンティティの分散分析結果

競技者アイデンティティ (AIMS-J尺度)		
<b>&lt;主効果&gt;</b>		
(1) 国 (日本)	4.91	F=5.48, p<.05
(米国)	5.17	
(2) 性 (男性)	5.11	F=1.41, p>.05
(女性)	4.97	
(3) 競技レベル (大学代表)	5.47	F=56.04, p<.001
(レクリエーション等)	4.61	
<b>&lt;交互作用&gt;</b>		
(1) 性×競技レベル		
(女性・レクリエーション)	4.41	F=5.46, p<.05
(女性・大学代表)	5.54	
(男性・レクリエーション)	4.81	
(男性・大学代表)	5.41	

注：交互作用は有意差のあるものだけを示した。

表4. 日米における競技者アイデンティティから目標志向性への重回帰分析結果

	説明変数 (競技者アイデンティティ)			
	日本		米国	
	標準偏回帰係数	t	標準偏回帰係数	t
課題志向性	.17	2.68 **	.21	2.84 **
自我志向性	.06	1.07	.11	1.67
社会志向性	.28	5.50 ***	.08	1.06
個人志向性	.15	3.07 **	.20	3.03 **

\*\*p<.01 \*\*\*p<.001